

一般社団法人 日本・ドミニカ共和国友好親善協会
第4回 World Baseball Classic 開催記念コラム
第五回：“Same sports from different perspectives”

文：エドウィン・ドミンゲス（野球エージェント）

ワールドベースボールクラシック（以下 WBC: スペイン語では Clásico Mundial de Béisbol）は3月7日から始まるが、野球界は本イベントで優勝した経験がある日本とドミニカ共和国に注目している。日本は2006年と2009年に優勝、ドミニカ共和国は2013年に無敗で優勝している。今回、私の友人であり、日本・ドミニカ共和国友好親善協会会長である鈴木渉氏の依頼により、本コラムを執筆した。本コラムでは、ドミニカ共和国と日本の野球の違いをプレースタイル、選手の育成、プロリーグの観点から解説する。

プレースタイルと戦略

私は日本とドミニカ共和国のプレースタイルの違いはそれぞれの文化の違いを反映していると考えている。日本における野球は、集団によるゲームであり、各選手の重要性は同じである。稀な例外は大谷翔平選手であるが、日本の野球ファンは自分の最良チームを応援しに球場に足を運ぶのであり、特定の選手を応援しに行く訳ではない。

日本の野球は詳細まで至る戦略が重視される。日本人にとって、走者を先の塁に進めるべく、ボールにコンタクトすることが、本塁打を打つと同様に重要である。また、日本の選手は野球の基本と小さいプレー（良い走塁と守備、正確な位置への送球）の実行に重きを置いている。

一方、ドミニカ共和国の野球はより個人主義である。幼少時から子供達はボールを強く打つこと、速い球を投げることを教わり、必ずしも野球の基本について学ぶことに焦点を合わせていない。つまり、我々は戦略ではなく、純粋な才能で試合に勝っているのだ。

また、ドミニカ人選手はグラウンド上で最も感情を露わにしていると言える。過去の WBC でもそうだったが、ドミニカ共和国代表チームは通常のプレーでさえも大騒ぎする。これはドミニカ共和国や他のカリブ海諸国のみで見られる独特のプレースタイルだ。



札幌ドームで行われた日本ハム対ソフトバンクホークスの試合を視察する筆者（ドミンゲス氏提供）

選手の育成

日本の野球は米国と似たシステムで選手を育成している。子供達は学校に入り、小学生から大学までのチームで、選手としてのレベルを自然な形で上げ、ドラフトによりプロ野球に入る。たとえ野球の世界では成功しなくても、若者たちは他の有望な分野で人生の機会に恵まれるし、勉強を続けることも出来る。

一方、ドミニカ共和国での事情は大きく異なる。野球をしたい若者はリトルリーグ、若しくは教育機関としての機能を有さない野球クラブに入る。一旦 12-13 歳に達すると、野球少年とその両親は野球か勉強かどちらか一方を選ぶ必要に迫られる。この瞬間から野球を職業にすることを目指すが、多くの若者が野球に打ち込むため、プロ選手になれる機会は非常に少ない。12-18 歳の若者の多くは、いつの日か自分が次のデビッド・オルティスやペドロ・マルティネス、ロビンソン・カノーになることを夢見るが、それは学校教育の機会を完全若しくは一部犠牲にすることを意味する。不幸なことは、もし彼らがプロ契約を結ぶ機会に恵まれなければ、学力を有していないため、彼らは放りだされ、人生で限られた機会しか掴むことが出来ないリスクを背負うことになる。

プロリーグ

日本とドミニカ共和国はプロ野球リーグを有し、年間を通じ世界の一流選手のプレーを観ることが出来る。日本のプロリーグは日本プロ野球機構（Nippon Professional Baseball Organization: NPB）である。NPB は 12 チームで構成され、3 月末から始まり、10 月末の日本シリーズで幕を閉じる。NPB は、米国の大リーグ（Major League Baseball: MLB）に次ぎ、世界で二番目に競争力があるリーグであると言える。NPB のチームは日本の大企業の下部組織（例：楽天、ソフトバンク、日本ハム、読売新聞）で、国内の優秀な選手の雇

用を維持するほか、過去 **MLB** で成功した外国人選手を勧誘すべく、巨大な経済力を有している。また、**NPB** での球場では良い空気の中で、家族連れが最高品質のショーを楽しむことができる。

ドミニカ共和国では、ドミニカ野球プロリーグ (**Liga Profesional de Béisbol Dominicano: LIDOM**) がある。**LIDOM** はウインターリーグで、6 チームから構成され、10 月中旬から 1 月末まで開催される。ドミニカウインターリーグは、国内で最も重要なスポーツの試合で、毎年行われている。同ウインターリーグは、カリブ海で行われているウインターリーグの中で最もレベルが高く、その証左として多くのドミニカ人選手に加え、**MLB** や **NPB**、韓国の **KBO** (**Korean Baseball Organization: 韓国野球委員会**) で活躍した選手が参加している。しかし、我々のウインターリーグには限界がある。ドミニカウインターリーグは **MLB** や **NPB** のシーズンオフ直後に始まるため、参加を希望する多くのドミニカ人選手がプレーできないという問題があり、これがウインターリーグのレベルを多少下げている。例えば、マウロ・ゴメスやトニ・ブランコなど **NPB** でプレーしていたドミニカ人選手は本来ウインターリーグで観ることが出来たはずだが、日本での契約があるのでプレー出来ない。

また、**NPB** と **LIDOM** を分ける主要因はその報酬額にある。公式な指標は発表されていないが、**LIDOM** での最高報酬額はシーズン合計で約 100 万ペソ、米ドルで約 2 万 2 千ドル、日本円で約 200 万円位である。対照的に **NPB** での一流選手は、シーズン毎に 3 億から 5 億円、米ドルにして約 300 万から 500 万ドルを稼いでいる。このような理由もあり、一部には負傷のリスクを避け、**NPB** と締結した高額契約をリスクに晒さないよう、**LIDOM** への参加を望まないドミニカ人選手もいる。

エージェントとして

私は 2015 年末から、ドミニカ共和国のサンティアゴ市で野球エージェントとしてのキャリアを始めた。エージェントとなった理由は、自分の夢であった職業野球界に自分がマネージメントする選手を通じて所属すること、そして私が持つスポーツの経験や職業トレーニングの知識が、米国や日本での成功を夢見る若者たちへの助けになると思ったからである。私の仕事は、自分がマネージする選手たちが米国や日本の文化にスムーズに溶け込み、野球に集中できる環境を作ることである。

今後すぐに、私がマネージしている 3 人の選手 (ドミニカ人 2 人、ベネズエラ人 1 人) が **BC** リーグの富山サンダーバーズ、四国アイランドリーグの徳島インディゴソックスでプレーする予定である。私のビジョンと願いは、**BC** リーグと四国アイランドリーグと同様、**NPB** においてもドミニカ人選手が増え、試合で活躍することである。多くの才能あるドミニカ共和国の若者が、プレー機会が無いことから引退を余儀なくされている。私は、日本で彼らが満足な形で野球を続け、日本野球の多様化にも貢献できると考えている。



筆者が代理人を務める 16 歳の有望選手。これからプロチームにアプローチするとのこと。
(ドミンゲス氏提供)

WBC の結果予想

私の願いは日本とドミニカ共和国が決勝戦で当たり、ドミニカ共和国代表が僅差で日本代表に勝ち、世界チャンピオンに返り咲くことである。これにより、WBC の歴史で日本が 2 回優勝、ドミニカ共和国が 2 回優勝で、引き分けとなるのだ (笑)。

筆者紹介

Edwin Domínguez (エドウィン・ドミンゲス)

1993年ドミニカ共和国サンティアゴ市生まれ。米国 Hannibal-LaGrande 大卒（経営学学士）。同大学在籍時に大学野球部で主将としてプレー。2014-2015年の米国中西部リーグ（Midwest Conference）で指名打者として栄誉賞（Honor）を受賞。2015年に DTO Sports Agency を立ち上げ代表取締役役に就任。現在は野球エージェント業をこなす傍ら、創価大学で経済学修士過程に在籍。エクトール・ドミンゲス駐日ドミニカ共和国特命全権大使のご子息でもある。東京都在住。

DTO Sports Agency: <http://dtosportsagency.com/>